

訃 報



故 石 藏 文 信 先 生
(1955 - 2022)

石藏文信くんを悼む

石藏文信先生が、亡くなりました。享年 68 歳でした。あまりにも早いです。

彼が前立腺がん罹患しており、しかも全身骨転移していると、小生が知ったのは、図らずも昨年 2021 年の神戸で開催された本学会の総会の際です。彼が功労会員に選出され、その返礼の中で、自ら前立腺がんのステージ 4 と言ったのです。全くサラッと行ったので、気に留めた方は少なかったかもしれません。それくらい、何気なく言ったのです。この時はすでに確定診断後 1 年が経っていました。やはり病魔には勝てず全身倦怠感に苛まれたようですが、ホルモン療法にて通常の日常生活が送れるまでになり、テニスやゴルフをするまでになったそうです。なんと今年の今頃、一緒にゴルフを楽しみ、ガンの「が」の字も感じないほどでした。その後の様子伺いのメールに対しても、多くの講演をこなしており、自らは長命を希望せず、余生を楽しむとメールしてきました。その小康状態に安堵していたのですが、今年の「婦人公論」の 10 月号の彼へのインタビュー記事に、「体の調子が悪く、歩くのもままならない」とあり、すぐメールをしたのですが、返事はありませんでした。10 月 10 日のことです。しかし既に 10 月 3 日に他界されていたことを後で知りました。なんで、そんなぎりぎりまで、インタビューに答え、記事を書き、雑誌を出してたんだ。馬鹿か、お前は。「婦人公論」に彼はこう言っています。「確かに体はしんどい。しかし、私の体はポカポカとして満ち足りています。どのような亡くなり方でも痛みや苦痛はともなうので、人が機嫌よく死の瞬間を迎えるの

は難しいけれど、余命を知ったあとも機嫌よく生きることならできる。そして自分なりの「死に支度」を通して、最期まで自分らしく生き、思い残すことなく旅立つことは可能だと思うのです。」(原文のまま)そして、彼は逝ってしまいました。

石藏文信先生は、1955 年京都で生まれ、大阪府立高津高校から三重大学医学部卒業後、大阪大学医学部第一内科入局、大阪船員保険病院を経て、国立循環器病センターへ。その後、大阪厚生年金病院(現、JCHO 大阪病院)、大阪警察病院、米国メイヨークリニックを経て、大阪大学医学部保健学科へ赴任されました。小生とは、国立循環器病センターと阪大保健学科で一緒でしたが、小生が阪大を定年退職後、大阪樟蔭女子大学教授として赴任され、大阪大学人間科学研究科未来共創センター特任教授も拝命されています。

彼が携わった仕事は数多く、ここではその一部の記載にとどめます。国循時代は、当時盛んであった経皮経静脈的僧帽弁交連切開術 (PTMC) の血行動態の研究や心房利尿ホルモン (後のナトリウム心房利尿ペプチド: ANP) にも興味を示し、その研究により学位を取得されています。米国メイヨークリニックではリサーチフェローとして、犬圧負荷心肥大モデルで心肥大に伴う血行動態変化と心筋における ANP, BNP などの発現を検討しました。阪大保健学科へ赴任後は、経静脈性超音波造影剤の開発、適応発展にたずさわって、微小循環の解明にも進みました。多くはゼミの学生たちと共に、深夜にも及ぶ

動物実験でしたが、神戸や岡山、筑波、北海道からの共同研究者を迎えています。コントラストエコー法の研究は進み、学生たちにその成果を発表してもらいました。国内のみならず海外の、例えば American College of Cardiology や米国心エコー学会の年次集会の1セッションのほとんどを我々が占めることもありました。研究対象は、in vitro のみならずイヌ、ラット、マウスに及び、特にマウスの心筋染色では心筋肥大シグナルの解明に迫りました。（詳細は、PUBMEDなどを参照ください）

彼を語るには、実は、超音波以外での活躍を述べなければなりません。国循時代に、心不全患者や閉塞性動脈硬化症の患者さんから性機能の相談を受けることがしばしばあったそうで、以来レジデントを集めて男性性機能の研究を開始し、丁度、バイアグラが登場したこともあり、熱が入ったようです。男性性機能障害のみならず、男性更年期障害、特に中高年のメンタルケア、うつ病治療に取り組み、全国でも先駆けとなる「男性更年期外来」を奥様の眼科医院に併設。男性更年期の本を多数出版していますが、そのタイトルが魅力的で、例えば「巨人性うつと阪神性不安」。プロ野球を引き合いに出し、中高年男

性の心の内を解説したもので、面白い観点で感心しました。夫の言動への不平や不満がストレスとなって妻の体に不調が生じる状態を「夫源病」と名付け、「妻の病気の9割は夫がつくる」を出版しています。男性更年期という概念が広がるにつれ、テレビへの出演も多くなり、タレント並みでした。

料理も得意で、メイヨー・クリニックでは、彼の料理を楽しみに多くの医師や技師が彼の家を訪れ、保健学科時代には、BBQは食材の購入から火おこし、焼き上げまで全てが彼の担当で、なんと、大阪ガスのクッキングスクールの講師を務め、「男のええ加減料理」なる本まで出版しています。

以上の如く、全く八面六臂の活動家で、手がけたことが全て一流だったのです。何事にも手抜きはなかったのです。そして彼の性格を皆が愛し、あこがれ、仲間が増えていったのです。しかし、やってしまった、たった一つの失敗、それが、前立腺がんの見落としだったのです。

石蔵先生、永遠に。 合掌

（日本超音波医学会名誉会員、大阪大学名誉教授、JCHO大阪みなと中央病院名誉院長 別府 慎太郎）